



第35回東北家畜衛生協議会検討会及び 東北支所主催各部門検討会報告

第35回東北家畜衛生協議会検討会及び平成19年度の東北地域病性鑑定各部門及び放牧衛生の検討会を以下の通り開催したので、概要を報告する。

第35回東北家畜衛生協議会検討会は東北家畜衛生協議会（会長：研究管理監（東北担当））、動物衛生研究所東北支所の共催により平成19年11月1日、2日の両日、秋田市の秋田温泉さとみを会場に東北各県の家畜保健衛生所職員を中心とする93名の参加を得て開催された。特別講演として鳥取大学の伊藤壽啓先生による「高病原性鳥インフルエンザの感染経路究明、特に野鳥での調査を中心に」、検討テーマとして「豚の生産現場における感染症対策を考える」を掲げて、当所国際重要伝染病研究チームの山田俊治首席研究員による「オーエスキー病撲滅の基本戦略」、日本獣医生命科学大学の福所秋雄先生による「動物用ワクチンの概要と適正使用について」の2つの特別講演と東北各県からの「豚感染症対策の実例報告」を行い、オーエスキー病対策をテーマに総合討論を行った。本協議会は東北地域の家畜保健衛生所に加え、大学、家畜改良センター、動物検疫所などからも動物衛生関係者が一堂に会し、参加者が講師を囲んで泊まり込みで議論、情報交換を行う形式で行っており、参加者からは「他ではできない情報交換の場となり有意義」との評が寄せられている。

第26回東北病理標本検討会（「病理」）と第16回家畜衛生部門別検討会（「細菌」）は、平成19年9月13日、14日の両日、七戸町商工会会議室及び東北支所会議室、実験室において開催された。参加者は、「病理」には東北各県の病理担当者かつくばの長期研修生、家畜改良センターから16名、動衛研

職員1名及び運営係を含め支所から5名の合計22名、「細菌」には各県の細菌担当者12名、支所から3名の合計15名であった。「病理」は播谷亮首席研究員の「牛のパスツレラ肺炎」の講演に引き続き、参加者が事前に提出された標本を検討した上で参集し会場で討議する形式の標本検討会を行った。本検討会は長年にわたり各県担当者の病理診断能力の向上に貢献してきた。「細菌」は培地メーカー学術担当者を講師にお願いして講義と実習形式で大腸菌、サルモネラ、キャンピロバクターの培養法について最新の情報を得ることが出来た。本検討会では久々の実習を中心とした企画であったが、参加者の評判は良好であった。

第27回東北地域病性鑑定担当者会議（「ウイルス」、「生化学」）及び第3回東北地域放牧衛生担当者会議（「放牧衛生」）は、平成19年10月11日、12日の両日、支所会議室と七戸町商工会会議室において開催された。参加者は東北各県の家畜保健衛生所、家畜改良センター及び支所職員で、「ウイルス」には講師を含め16名、「生化学」には同16名、「放牧衛生」に同12名であった。「ウイルス」では講義として北里大学の竹原一明先生の「家禽及び徳用家畜の重要ウイルス感染症について」、当所人獣感染症研究チームの真瀬昌司主任研究員の「高病原性鳥インフルエンザの最新知見」に引き続き、講師及び支所職員を助言者にして各県病鑑担当者の事例報告を行った。「生化学」では講義として当所生産病研究チームの高橋秀之チーム長の「潜在性乳房炎の早期発見・早期治療の現状と展望」、宮本亨首席研究員の「周産期の脂質代謝等」、及び安全性研究チームの村田英雄首席研究員の「飼料汚染におけるカビ」に引き続き各県の事例報告を行った。「放牧

衛生」では各県から放牧衛生対策の事例発表に続き、環境・常在疾病研究チーム（東北支所）の寺田裕上席研究員の「放牧を巡る最近の話題」、最後に講義として（社）日本草地畜産種子協会の放牧アドバイザー落合一彦先生に「牛の放牧管理技術」の講演をお願いした後、活発な質疑を以て終了した。

平成19年度、東北各県の家畜保健衛生所の技術支援、関係機関相互の情報交換、連携協力を図るた

め東北支所が企画、運営する各種協議会、検討会はすべて来年度の継続希望を確認して無事終了した。最後に、これらの協議会・検討会等を開催するに当たり、東北支所のすべての職員の献身的な貢献をここに書き留めるとともに、講師はじめ各県運営委員など関係各位の多大なご協力に対し東北支所を代表し感謝申し上げます。

（濱岡隆文研究管理監（東北担当））



第35回東北家畜衛生協議会検討会



第27回東北地域病性鑑定担当者会議（生化学）



第26回東北病理標本検討会（「病理」）